

Title	カール・ディールのアダム・スミス論(上)
Sub Title	
Author	三邊, 金蔵
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.9 (1923. 11) ,p.1539(65)- 1546(72)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19231113-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カール・デイールのアダム・

スミス論(上)

三 邊 金 藏

(一)

アダム・スミスの名著「國富の性質並びに原因に關する研究」は一七七六年に公にせられ、其根本思想は爾來久しくあらゆる文明國の國民經濟學と其實際政策とに典制的影響を與へて居るが、併しアダム・スミスは新しき研究方法を採用せるものではなくして、重農學派と同じ自然法的思想より出發したるものに外ならぬのである。乍併是よりしてアダム・スミスは直接に重農

學派に負ふものなりと想像せんと欲するは全く誤にして、スミスは其最も重要な經濟學上並びに法律哲學上の見解を重農學派特にテュルゴオより得たるものなりといふ彼に對する非難は決して正當ではない。スミスが一七六〇年代の初め、即ちテュルゴオの「富の形成及び分配に關する省察」(一七七〇年)が世に出づる五六年前に爲せる講義の、近頃發見せられたる筆記は之に對する好まざる證據である。加之、重農學派の其外的主要著作も其當時は未だ公にせられて居らなかつたのである。ケネーの經濟表(Tableau Economique)は一七五八年に完成せられては居たが、併し一七六〇年に至りて初めてミラボオの「人民の友」(ami des hommes)に掲載せられたのである。スミスがアンソイクロバデーに於けるケネーの論文及び二三の重農學派の古き論文を彼の講演を準備せる際に夙くも聞知せるや否やは少くとも疑問たるを免れぬ。更らに

業は國富の増進を最も良く保障する仕組なりとして之を賞揚したのであるが、富の直接原因たる可き此分業なるものは、彼の見解に従へば、人類の希望に基きて發生せるものではなくして一定の自然的理法に基き必至的に生ずるものである。曰く「此(分業)は他人と交換せんとする人間性情の直接の傾向——人は皆之を有す——より發生するものである」(講義一六九頁)。而も總ての人々に共通なる傾向は自愛に基くのであつて、「此(自愛なる)性向の言語は余の欲するものを余に與へよ然らば汝は汝の欲するものを得可しである。人間が總てのものを期待するのは自愛からであつて、夫の如く慈悲からではない。酒屋やパン屋は慈悲から吾々に奉仕するのではなくして自愛から吾々に奉仕するのである」(講義一六九頁)加之「交換に對する此性向は天稟の才能若くは技倆の相違に基くものでは

ないのである。否、一般に斯の如き相違なるものありや否や疑はしいのである、少くとも其は吾々が信するよりも遙かに少いのである。分業が天稟の才能の結果たるよりは寧ろ天稟の才能なるものが分業の結果たるのである。荷持と哲學者との相違は彼等の生涯の初期四五年間に於ては先づ皆無である云ふ可きであらう。唯だ彼等が異なる職業に従事するに至つて初めて彼等の見解は隔り而して次第に相違するに至るのである」(講義一七〇頁)

却說スミスは斯の如き筆致もて詳細に分業を以て人間の自然的性質の發露に外ならずと爲す所以と富の増加に對する其影響とを論し終りて後、更に一步を進めて經濟生活の自然的範疇を説く。即ち彼は此所に夙くも既に彼が後年に至りて「國富論」中に詳述せる自然價格論を、而も次の如くに説明するのである。曰く「吾々は勞

吾々の記憶せねばならぬことはアダム・スミスがデュガルド・ステュワルトの告ぐるが如く一七五五年に既に彼の社會哲學的理論に關する根本思想を包含する一個の論文を書いたといふことである。ステュワルトの言ふ所に従へば、スミスの此思想はグロテウス、ホツプス、プッフヘンドルフ等自然法學者の先覺に溯るものであつて、ジョン・ロツク其他の英國法律哲學者も亦たスミスの上に典制的影響を及ぼしたのである。然れば事實は重農學派もスミスも共に同じ源流に汲めりといふに外ならぬのである。スミスは彼の法理學的並びに經濟學的體系に對する根本方針を建設し終りたる後に於て初めて重農學派の人々と接觸し、新しき刺激を受けて之を彼の經濟學上の名著中に取り入れ、斯くて彼の體系の多くの部分に全く新しき形體を附與するに至つたものである。公法、私法に關する原則と共に

經濟學の領域に亘りて論議を試むる所多き前述の講義に於て、スミスは徹頭徹尾自然法の信奉者たることを示して居るのである。彼の見解に従へば、法理學とはあらゆる國民の立法の基礎たる可き一般原理を論究する科學たるのである。「正義の目的は侵害に對する保障にして、警察の目的は貨物の低廉と公安と清潔とである」(講義第一頁)。スミスは又た法律と政府との目的及び任務は果して那邊に存すと爲す可きやに關し次の如き獨特の説明を下せり。曰く「法律と政府とは自己の財産を増加したる個人を保障して、彼が安らかに其果實を享樂し得るが如くに爲す以外、他に目的なるものを有せざるが如く思はる。法律と政府との援助に依りてあらゆる技術は榮る、是より生ずる財産の不平等は十分に保障せらるゝのである」(講義一六〇頁)。彼は後日「國富論」に於て爲せると同様、分

のにして、従つて世人がスミスの學説を非難して物質主義に墮せりとなすは必しも不當ならず」と謂ひ、而してブレンタアノは古典派經濟學に對し次の如き批判を下すのである。曰く「古典派經濟學は職業、階級、國民性、文明程度等のあらゆる特殊性を有せざる人間を假設した。其は農商の別を立てず粗野なる無産者の本能と教養ある文化人の本能との間に差別を認めず、勿論勞働者階級自體の間に大なる相違あるが如きは全く之を措て顧みざるのである。其は人種、宗教、時代の相違の如きを知らざるのである。

其心理學には人間行動の二個の動機あるのみである。其一つは最大利潤の追求であつて、此は、其見る所に從へば、性の衝動が問題とならざる一切の人事關係を最も力強く支配するものである。乍併其は性の衝動は更に一層有力なりと爲す。故に是等兩動機が相互に牴觸すると

きは彼は此に及ばざれども、併し其他の總てに於ては營利の衝動最も優勢である。フランスの重農學派、アダム・スミス、リカルドオ及び古典派經濟學の其他の建設者は此見解の全歸結を示す」。が併しながらアダム・スミスが斯の如くに利己主義を代表せりと謂ひ、彼が斯くて物質的、若くは或る人々の言ふが如く資本家に有利なる偏頗なる見解を打ち建てたりといふは果して正當であらうか否か。アダム・スミスの心理學的及び倫理學的根本概念は實際斯の如きものではないのである。スミスの所見を正しく批判せんが爲めには彼の經濟學上の大著の外に、彼の哲學上の大作たる道徳情操論を合せ讀まねばならぬのである。此兩者に就ては其は互に相容れずといふが如き批評ありて屢反覆せらるゝのであるが、併し此は全く支持し難きものである。洵に哲學上の大著は一七五九年に公にせられ、經濟

働の價格が勞働に従事中吾々を維持し、教育の費用を償ひ、半途にして仆れ若くは事業に成功せずして終る其危險を補償するに足るものなるとき、之を其自然價格と名くるのである。此價格を以てすれば勞働者に對する十分なる獎勵は茲に存在し、商品は需要に應じて生産せらるゝのである(講義一七六頁)。併し自分は此所では如何にスミスが國民經濟上の此自然説を更に詳述したるか、而して又其が如何なる形體をとりて「國富論」中に現はれたるかを説かうとは思はない。自分はスミスが經濟生活の樞軸となせる自愛を稍詳細に述べて見たいと思ふのである。

(二)

却説自愛は極めて屢々利己主義と同一視せられ、従つてアダム・スミスは利己主義を國民經濟上の理論的及び實際的原則に祭り上げたかのように説く間違つた見解が常に行はるゝのを見

るのである。そこで今此問題の理解に指を染む可し、して之が爲めには、先づ第一にアダム・スミスの倫理上の根本概念を一層詳細に討究せねばならぬのである。蓋しスミスは彼の此見解に基きて其經濟學說の自然法的基礎に新しき見地を附加したのであつて、スミスの經濟理論及び經濟政策の全傾向を知らんが爲めには、是非共此一事を知らねばならぬからである。

そこで先づ第一にスミスの自愛主義に對し二三の經濟學者が如何なる批判を下せるかを聽かんならば、カール・クニスはアダム・スミスは「自愛と利己とをあらゆる人間行動の唯一の動機なりと爲し、他の一切の動機の決定的影響を拒否せり」として之を非難し、ヒルデブランドは「經濟學が人類の倫理的任務に對し一切の交渉を失ふに至りたる其原因は、個人の利益を擧げて經濟學の最高原則となせる點に伏在するも

一ではない。他人の幸福を希ふ博愛の動機は無限に之を施して妨げざれども、利己的動機は倫理に違ざる範囲内に於てのみ之を逞しふし得るのである。實に人間活動の方面の異なるに従つて利己主義を行はしめ得る度合も亦た異なるのであつて、其特に最大の活動をなし得る方面は即ち經濟生活の方面に外ならぬのである。が併し此所に於ても其は亦た決して無制限なるを得るものではなくして同胞の幸福に對し適當なる斟酌を加へねばならぬのである。即ち自愛は此所に於ても亦た同胞に對する愛によりて限定せられねばならぬのである。各人は外界の利益を求むる競争に於ては敵手に卓越せんが爲めに至心全力を傾注せねばならぬのであるが、併し決して不正なる手段を以て敵手を妨げ若くは之を押ゆ可きではないのである。蓋し此の如きは卑怯にして君子人の争ではないからである。

敏慧は自己の幸福の爲めに何を爲す可きかを教へ、正義は他人の幸福を顧みる可きことを教ゆ。敏慧と必ず相伴はねばならぬ正義こそは個人が全體に對して負ふ省察を教ゆるものにして、スミスは各個人の中に必ず内在する社會的觀念を説いて止まざるのである。此自然の憲法に依りて人間は初めて社會をなして生活し得るのである。此社會的關係は更らに又た一般の利益の爲めには個人の利益を抑ゆ可きものなることをも要求するのである。曰く「賢明有徳の人は如何なる時代に於ても自己の屬する階級又は社會の公の利益の爲めに自己の利益を犠牲にするを辭せぬ。彼は又た常に此階級又は社會の利益を殺ぎて其上に立つ國家のより大なる利益の爲めに資するを辭せぬ。故に彼は又た同様にあらゆる是等の從屬的利益を宇宙のより大なる利益の爲めに、然り神自らが其直接の支配者たる

學上の大著は一七七六年に公にせられたものであるが、併しスミスは一七九〇年に現はれた道徳情操論の第六版に於て第一版の根本概念を變更す可き追加は毫も之に加へなかつたのである。スミスは、此哲學上の大著に於ては、彼のシャフツペリイ卿の思想を深め之を完成したハツチエソン並びにヒュームに依りて代表せらるる所謂スコットランド學派の倫理を地盤として其上に立つて居るのである。しかも此學派は利己主義を徳の究極の原因となさざるのみか實は斯の如き見解を論難するのが其特色であるのである。而してスミスはシャフツペリイと同様人間は利己と博愛との二つの感情に依りて動かさるるものであつて、此兩動機が能く相調和して作用する所に徳に對する最も良き結果は生ると爲した。彼はヒュームより得て更に之を獨特のものに鍊り上げた同情を其發足點となした。彼は

其著の初めに之を次の如くに説いて居る、曰く「人間は如何に利己的であるとしても、彼の性質中には明かに或る原則のあるありて、他人の幸運を希ひ、他人の幸福を、假令自らは之を見る樂みの外には何等得る所なしとするも、而も猶ほ自らにとりて必要なりと爲さしむるものである。吾々が他人の不幸を見、若くはまざくと之を想見するに至りたるるとき之に對して感ずる情緒たる憐憫又は惻隱の情なるものは即ち此種のものである」。即ち吾々は此同情同感の心換言すれば博愛の情に依りて人間の行動を或は有徳なりとし或は不徳なりと批判し得るのである。是等の精神的動機は、自然の配合に依りて宛かも巧妙なる時計の如く自から人格中に融合調和して人間の幸福と完成とを最も善く生ずるが如くに作用するのである。併し人間の此二つの動機を如何許り作用せしめ得るかの度合は二者同

態は資本主義的社會組織と稱せられる。而して此組織も亦、他の社會組織と同じく、それに相應せる經濟形態を其基礎となしてゐる。即其基礎とは、全く一定せる、財の生産及流通の方法である。世人は、此一定せる方法を、資本主義的經濟方法、或は簡單に、資本主義と名付けてゐる。

然らば此資本主義的經濟なるものは、如何にして發生せしものであるか、又如何なる意義を有するかに關して、茲にベルンシュタインの所説の大要を窺つてみたいと思ふ。

一 資本の意義

先づ、資本とは何ぞやの問題に入る。之に對するベルンシュタインの答は必ずしも明確ではないやうである。彼は、資本の本質を明確ならしめんが爲には、資本なる言葉は如何にして發生したか、如何にして其は概念となつたか、又

此概念は本來何を意味してゐたか、の研究に入るを以て最良の方法と考へてゐる。何となれば、資本なる言葉は、今日、極めて種々なる意義に用ひられてゐるからして、之等の用法から或る共通の概念を直ちに歸納するは、可なり困難な問題であるからである。

姑く彼に従へば、此語は中世に發したものであり、ラテン語の *caput* (頭) から派生したものである。而して世人は、債務に對して支拂はれる利子と區別せられた貸附元金額と解してゐたが、其債務は使用財から成ると貨幣から成るとを問はなかつた。後に至つて、利益を獲んが爲に用ひらるゝ一層大なる貨幣額が資本と稱せられた。若し之が利子を取つて貸出されたのであるならば、貸付又は利附資本 (*Leih- oder Wucherkapital*) であり、商業に投資されたのであるならば、商業資本 (*Handelskapital*) であつ

より大なる人類の社會の爲めに犠牲に供するを辭せぬであらう」。

スミスは正義にして毀たるれば社會全體は一日も立つ可からずとなしたのである。曰く「正義は全殿堂の立つ基石である。若し此基石にして除かるゝことあらんか、然らば人類社會なる巨大なる全建設物は、然り此世に於て之を保ち之を支持することが謂はゞ自然の特別なる任務たる彼の建設物は瞬時にして必ず土崩瓦解して去るであらう」。しかも正義を毀損する徒輩は何の世にも存在するが故に、斯の如きを罰して正義の勝利に導くこそ即ち法律秩序の任務とするところなれど——而してスミスは之と共に其自然法的見地に立ち戻るのである。曰く「正義の法律にして保持せられずとせば社會は一日も立つ可からずして、而して相互に不當を加ふるを看過せざる人間の社會的關係は不可能たるが故に、

此必要に迫られて吾々は之を毀損する人を罰して正義の法律の貫徹せられんことを圖るのである：社會が此目的の爲めに設定する規則は各國若くは各國家の民法刑法を示すものたるのである、而して是等規則の頼つて立つ若くは頼つて立つ可き原則こそは恐くは總ての科學中にて最も重要な特殊科學、しかも今日に至るまで研究せらるゝこと最も少かりしもの、即ち自然法の對象たるのである」。

資本主義的經濟組織の本質と作用

——ペルンシュタインの所論——

金原賢之助

現代の文明諸國に於ける財産及權利の分配狀